

第8号の発刊に寄せて

豊田市矢作川研究所 所長
梅 村 諒 二

皆さま方には、豊田市矢作川研究所に対し、日頃より多大なご支援、ご助言・ご意見を賜りありがとうございます。お陰様でここに所報第8号の発刊ができる運びとなりました。年々、生物学以外の論文もお寄せ頂くなど充実し、幅広い内容でお届けできるようになってまいりました。

かつてアユの豊漁が続き、わき返っていた矢作川も、ここのところ元気がありません。戦後、半世紀以上にわたり努力した結果、わたしたちの生活は豊かになりましたが、平成に入って矢作川は、成人病の兆候が各所に現れ大変苦しんでおります。長期療養中といっても過言ではありません。

このまま見て見ぬふりをして、将来に禍根を残さないか。矢作川は歴史的に見ても流域130万人の生活・文化・産業活動を支えて来ましたが、今後も子々孫々にとってかけがえのない矢作川であることには間違いありません。矢作川が健全な河川に回復しなければ将来の流域発展につながりません。何とんでも健やかな矢作川を取り戻さなければなりません。

矢作川にはさまざまな課題が山積しております。降雨後の長期汚濁、年中行事になっている濁水、慢性化しているアユの不漁、水質悪化による魚類相の変化、大型糸状藻類の発生、河床のアーマー化、大腸菌群数の基準オーバー、冷水病によるアユの大量死、天然遡上アユの減少等どれをとっても根が深く深刻な課題ばかりで、これらの多くは、直接・間接はあるにしても、「水」との関わりが深いものばかりです。

矢作川の水は農業・工業・都市用水に大量に利用されているので、平年では下流域を流れる水は不足しています。昭和52年～平成12年の24年間の平均利水率は、明治用水頭首工で41%に達しています。この間に50%を超えた年が6回もありました。これだけ水を大量に利用する一級河川は少なく、木曾川や豊川の20%台と比べて飛び抜けて多くなっております。

矢作川は、降雨後に長期間水が濁る傾向があります。集中豪雨後など半年以上にわたり濁水が流れることは珍しくありません。豊田市内の西広瀬小学校は、昭和51年7月3日から平成15年11月8日まで毎日水質汚濁調査を続け、1万日に達しました。親子二代にわたるこの記録からも降雨後の長期汚濁の傾向が読み取れます。濁水により水生生物は大きな影響を受けるので、濁度をどのように下げるかは大きな課題といえます。

矢作川にはダムが七つあり、ダムからの低水温の排水も大きな課題になっております。低水温によりアユの冷水病が発生し、全国的にも大きな話題になっております。平成14年以後矢作川でも大きな被害が発生しております。

矢作川の水生生物を取り巻く課題には少ない水量、濁度の高い水、低水温の水等がありますが、これらが相互に関係し合っただけで被害を一層大きくしております。矢作川研究所は創設以来これらの課題と真摯に取り組んでおります。今後も所員あげて取り組んでいきたいと考えておりますので、大方の皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

平成16年3月吉日